

貝殼

芥川龍之介

青空文庫

一 猫

彼等は田舎あなに住んでゐるうちに、猫を一匹飼ふことにした。猫は尾の長い黒猫だった。彼等はこの猫を飼ひ出してから、やつと鼠の災難だけは免れたまぬかことを喜んでゐた。

半はんとし年ばかりたつた後のち、彼等は東京へ移ることになつた。勿論猫も一しよだった。しかし彼等は東京へ移ると、いつか猫が前のやうに鼠をとらないのに気づき出した。「どうしたんだらう？

肉や刺身さしみを食はせるからかしら？」「この間Rさんがさう言つてゐましたよ。猫は塩の味を覚えると、だんだん鼠をとらないやう

になるつて。」——彼等はそんなことを話し合つた末、試みに猫を餓ゑさせることにした。

しかし、猫はいつまで待つても、鼠をとつたことは一度もなかつた。そのくせ鼠は毎晩のやうに天井裏てんじやうらを走りまはつてゐた。彼等は、——殊に彼の妻は猫の横わうちやく着やくを憎み出した。が、それは横着はなではなかつた。猫は目に見えて痩せて行きながら、掃はき溜だめの魚さかなの骨などをあさつてゐた。「つまり都会的になつたんだよ。」——彼はこんなことを言つて笑つたりした。

そのうちに彼等はもう一度田舎住ゐなかひをすることになつた。けれども猫は不相変あひかはらず少しも鼠をとらなかつた。彼等はとうとう愛想あいそをつかし、氣の強い女中に言ひつけて猫を山の中へ捨てさせてし

まつた。

すると或晩秋の朝、彼はさふきばやし雑木林の中を歩いてゐるうちに偶然この猫を発見した。猫は丁ちやうど度雀を食つてゐた。彼は腰をかがめるやうにし、何度も猫の名を呼んで見たりした。が、猫は鋭い目にぢつと彼を見つめたまま、寄りつかうとする気色けしきも見せなかつた。しかもパリパリ音を立てて雀の骨を噛み砕いてゐた。

二 河鹿

或温泉にゐる母から息子むすこへ人伝ひとづつてに届けたもの、——桜むすの実、
 笹餅、土瓶どびんへ入れた河鹿かじかが十六匹、それから土瓶の蔓むすに結びつけ

た走り書きの手紙が一本。

その手紙の一節はかうである。——「この河鹿かしかは皆雄をすに候。雌めすはあとより届け候。尤ももつと雌雄めすをすとも一つ籠に入れぬやうに。雌は皆雄を食ひ殺し候。」

三 或女の話

わたしは丁度ちやうど十二の時に修学旅行に直江津なほえつへ行ゆきました。

（わたしの小学校は信州の×と云ふ町にあるのです。）その時始めて海と云ふものを見ました。それから又汽船と云ふものを見ました。汽船へ乗るには棧橋さんばしからはしけに乗らなければなりません。

ん。私達のゐた棧橋にはやはり修学旅行に来たらしい、どこか外ほかの小学校の生徒も大勢おほぜいわいわい言つてゐました。その外の小学校の生徒がはしけへ乗らうとした時です。黒い詰襟の洋服を着た二十四五の先生が一人、ひとり（いえ、わたしの学校の先生ではありません。）いきなりわたしを抱き上げてはしけへ乗せてしまひました。それは勿論間違ひだつたのです。その先生は暫しばらくたつてから、わたしの学校の先生がわたしを受けとりにやつて来た時、何度もかう言つてあやまつてゐました。——「どうもうちの生徒にそつくりだもんですから。」

その先生がわたしを抱き上げてはしけへ乗せた時の心もちですか？ わたしはずるぶん驚きましたし、怖いやうにも思ひました

けれども、その外ほかにまだ何なんとなく嬉しい気もしたやうに覚えてゐます。

四 或運転手

銀座四丁目ぎんざよんちやうめ。或電車の運転手が一人ひとり、赤旗を青旗に見ちがへたと見え、いきなり電車を動かしてしまつた。が、間違ひに気づくが早いとほうか、途方もないおほ声に「アヤマリ」と言つた。僕はその声を聞いた時、忽ち兵營や練兵場を感じた。僕の直覚は当たつてゐたかしら。

五 失敗

あの男は何をしても失敗してゐた。最後にも——あの男は最後には壯士さうしやくしや役者になり白瀬中尉しらせちゆうゑを当てこんだ「南極探険」と云ふ芝居へ出ることになつた。勿論それは夏芝居だつた。あの男は唯のペングイン鳥になり、氷山ひようざん あひだの間を歩いてゐた。そのうちに烈しい暑さの為にとうとう悶絶もんぜつして死んでしまつた。

六 東京人

或待合まちあひのお上かみさんが一人ひとり、懇意な或芸者の為に或出入りの呉

服屋へ帯を一本頼んでやった。扱さてその帯が出来上つて見ると、それは註文主ぬしのお上さんには勿論、若い呉服屋の主人にも派手はで過ぎると思はずにはゐられぬものだつた。そこでこの呉服屋の主人は何も言はずに二百円の帯を百五十円にをさめることにした。しかしこちらの心もちは相手のお上さんには通じてゐた。

お上かみさんは金を払つた後のち、格別その帯を芸者にも見せずにたんす箆筒たんすの中のちにしまつて置いた。が、芸者は暫くたつてから、「お上さん、あの帯はまだ？」と言つた。お上さんはやむを得ずその帯を見せ、実際は百五十円払つたのに芸者には値段を百二十円に話した。それは芸者の顔かほいろ色いろでも、やはり派手過ぎると思つてゐることは、はつきりお上さんにわかつた為だつた。が、芸者も亦また何も言はず

にその帯を貰つて歸つた後、百二十円の金を届けることにした。

芸者は百二十円と聞いたものの、その帯がもつと高いことは勿論ちやんと承知してゐた。それから彼女自身はしめずに妹にその帯をしめさせることにした。何、莫迦莫迦しい遠慮ばかりしてゐる？——東京人と云ふものは由来かう云ふ莫迦莫迦しい遠慮ばかりしてゐる人種なのだよ。

七 幸福な悲劇

彼女は彼を愛してゐた。彼も亦彼女を愛してゐた。が、どちらも彼等の気もちを相手に打ち明けるのに臆病だつた。

彼はその後彼女以外の——仮に3と呼ぶとすれば、3と云ふ女と馴染み出した。彼女は彼に反感を生じ、彼以外の——仮に4と呼ぶとすれば、4と云ふ男に馴染み出した。彼は又急に嫉妬を感じ、彼女を4から奪はうとした。彼女も彼と馴染むことは本望ほんまうだつたのに違ひなかつた。しかしもうその時には幸福にも——或は不幸にもいつか4に愛を感じてゐた。のみならず更に幸福だつたことには——或はこれも不幸だつたことには彼もいざとなつて見ると、冷かひややに3と別れることは出来ない心もちに陥つてゐた。

彼は3と逢ひながら、時々彼女のことを思ひ出してゐる。彼女も亦4と遠出をする度に耳慣れない谷川の音などを聞き、時々彼のことを思ひ出してゐる。……

八 実感

或殺人犯人の言葉。——「わたしはあいつを殺しました。あいつが幽霊に出て来るのは尤も過ぎる位尤もです。唯わたしが殺した通りの死骸になつて出て来るならば、恐ろしいことも何もありません。けれどもあいつが生きてゐる時と少しも変らない姿をして立つてゐたり何かするのが恐ろしいのです。ほんたうにどうせ幽霊に出るならば、死骸になつて出て来やがれば好いのに。」

九 車力

僕は十一か十二の時、空あき箱を積んだ荷車が一台、坂を登らうとしてゐるを見、後ろから押してやらうとした。するとその車を引いてゐた男は車越しに僕を見返るが早いか、「こら」とおほ声に叱りつけた。僕は勿論この男の誤解を不快に思はずにはゐられなかつた。

それから五六日たつた後のち、この男は又荷車を引き、前と同じ坂を登らうとしてゐた。今度は積んでゐるのは炭俵だつた。が、僕は「勝手にしろ」と思ひ、唯道ばたたたずに佇んでゐた。すると車の揺れる拍子に炭俵が一つ転げ落ちた。この男はやつと楯かぢぼう棒を下ろし、元のやうに炭俵を積み直した。それは僕には何なんともなかつた。

が、この男は前こごみになり、炭俵を肩へ上げながら、誰か人間にでも話しかけるやうに「こん畜生ちくしよう、いやに気を利かしやつて。車から下りるのはまだ早いや」と言つた。僕はそれ以来この男に、——この黒ぐろと日に焼けた車力しやりきに或親しみを感ずるやうになつた。

十 或農夫の論理

或山村さんそんの農夫が一人ひとり、隣家の牝牛めうしを盗んだ為に三箇月の懲役に服することになつた。獄中の彼は別人のやうに神妙に一々獄則を守り、模範的囚人と呼ばれさへした。が、免役になつて歸つて

来ると、もう一度同じ牝牛を盗み出した。隣家の主人は立腹し、今度も亦また警察権を借りることにした。彼等の村の駐在所の巡査はさつそく早速彼を拘こういん引した上、威みたけ丈高たかに彼を叱りつけた。

「貴様は性しやうも懲こりもない奴やつだな。」

すると彼は 仏ぶつ頂ちやう面づらをしたまま、かう巡査に返事をした。

「わしはあの牛を盗んだから、三箇月も苦役くえきをして来たのでせう。して見ればあの牛はわしのものです。それが家へ帰つて見ると、やつぱり隣の小屋にゐましたから、(尤も前もつとよりは肥つてゐました。)わしの小屋へ曳いて来ただけです。それがどこが悪いのです?」

十一 嫉妬

「わたしははずるぶん嫉妬深いと見えます。たとへば宿屋に泊まつた時、その番頭や女中たちがわたしに愛想あいそよくお時宜じぎをするでせう。それから又外ほかの客が来ると、やはり前と同じやうに愛想よくお時宜じぎをしてゐるでせう。わたしはあれを見てゐると何だなんか後あとから来た客に反感を持たずにはゐられないのです。」——その癖僕にかう言つた人は僕の知つてゐる人々のうちでも一番温厚な好紳士だつた。

十二 第一の接吻

彼は彼女と夫婦になつた後、^{のち}彼女に今までの彼に起つた、あらゆる情事を打ち明けることにした。その結果は彼の予想したやうに彼等の幸福を保証することになつた。しかし彼は彼女にもたつた一つの情事だけは打ち明けなかつた。それは彼が十八の時、或年上の宿屋の女中と接吻したと云ふことだつた。彼は何もこの情事だけは話すまいと思つた訣^{わけ}ではなかつた。唯ちよつとしたことだつた為に話さずとも善^よいと思つただけだつた。

それから二三年たつた後、^{のち}彼は何かの話の次手^{ついで}にふと彼女にこの情事を話した。すると彼女は顔^{かほいろ}色を変へ、「あなたはあたしを欺ましてゐた」と言つた。それは小さい刺^{とげ}のやうにいつまでも

彼等夫婦の間に波瀾を起す種たねになつてしまつた。彼は彼女と喧嘩をした後のち、何度もひとりこんなことを考へなければならなかつた。——「俺は余り正直だつたのかしら。それとも又どこか内心には正直になり切らずにゐたのかしら。」

十三 「いろは字引」にない言葉

彼はエディンバラに留学中、電車に飛び乗らうとして転ころげ落ち、人事不省じんじふせいになつてしまつた。が、病院へかつぎこまれる途中も譫う語はごとに英語をしゃべつてゐた。彼の健康が恢復した後のち、彼の友だちは何げなしに彼にこのことを話して聞かせた。彼はそれ以来別

人のやうに彼の語学力に確信を持ち、とうとう名高い英語学者になつた。——これは彼の立志譚である。しかし僕に面白かつたのは彼の留守宅に住んでゐた彼の母親の言葉だつた。

「うちの息子は学問をして日本語はすっかり知り悉つくしてしまひましたから、今度はわざわざ西洋へ行つて『いろは字引』にない言葉習つてゐます。」

十四 母と子と

彼は近頃彼の母が芸者だつたことを知るやうになつた。しかも今は彼の母が北京ペキンの羊肉ヤンヨウ胡同フウトンに料理屋を出してゐることも知

るやうになつた。彼は商売上の用向きの為に二三日北京ペキンに滞在するのを幸ひ、久しぶりに彼女に会つて見ることにした。

彼はその料理屋へ尋ねて行き、未だいまに白粉おしろいの厚い彼女と一時間ばかり話をした。が、彼女の空々そら／＼しいお世辞に幻滅げんめつを感じずにはゐられなかつた。それは彼女が几帳面きちやうめんな彼に何かケウトイ心もちを感じた為にも違ひなかつた。しかし又一つには今の檀那だんなに彼女の息子むすこが尋ねて来たことを隠したかつた為にも違ひなかつた。

彼女は彼の歸つた後のち、肩の凝りこの癒つたやうに感じた。が、翌日になつて見ると、親子の情などと云ふことを考へ、何か彼に素そつ気けなかつたのをすまないやうにも感じ出した。彼がどこに泊ま

つてゐるかは勿論彼女にはわかつてゐた。彼女は日暮れにならないうちにと思ひ、薄汚い支那の人力車に乗つて彼のゐる旅館へ尋ねて行つた。けれどもそれは不幸にも彼が漢ハンカオ口へ向ふ為に旅館を出てしまつたところだつた。彼女は妙に寂しさを覚え、やむを得ず又人力車に乗つて砂埃すなほこりの中を歸つて行つた。いつか彼女も白髪を抜くのに追はれ出したことなどを考へながら。

彼はその日も暮れかかつた頃、京漢けいかん鉄道てつどうの客車の窓に白粉臭い母のことを考へてゐた。すると何か今更のやうに多少の懐しさも感じないではなかつた。が、彼女の金歯の多いのはどうも彼には愉快ではなかつた。

十五 修辞学

東海道線の三等客車の中。大工らしい印しるし絆ばん纏てんの男が一人、
 江尻えじりあたりの海を見ながら、つれの男にかう言つてゐた——「見
 や。浪がチンコロのやうだ。」

(大正十五年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月27日公開

2004年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

貝殻

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>